



永井博先生を悼む 永井博先生の思い出

著者	八巻 和彦
雑誌名	筑波哲学
号	22
ページ	16-19
発行年	2014-03
URL	http://hdl.handle.net/2241/00122563

永井博先生の思い出

八巻 和彦

永井先生についての私の思い出は、東京教育大学大学院文学研究科哲学専攻修士課程の入学試験における口頭試問の場面から始まる。他の先生も居並ぶなかで、永井先生はとても真剣な眼差しで次々と質問を出されたので、他大学からの受験生である私は、先生の気迫に圧倒される思いで懸命に頭を働かせて答えた。ニコラウス・クザーヌスをテーマとした自分の卒業論文についての質問ならびに大学院に進んでからの研究計画について問われたに違いないのだが、その具体的な内容についての記憶はもはや残っていない。

下村寅太郎先生以来のクザーヌス研究の伝統を有する東京教育大学に進んでクザーヌスについての研究を継続したいと考えていた私にとって、合格発表の小さな掲示の中に自分の名前を見出したときの喜びはとても大きかった。そして、念願の入学を果たした私は、永井先生の授業に出席すると同時に、さっそく哲学研究室の書庫に出入りして、学部時代に目を通してみたいと思いつつもそれが叶えられなかった洋書の数々を見出して喜びに浸った。禁帯出の書物は、書庫に備え付けのコピー機を利用してコピーしたのだが、哲学研究室のコピー機は当時まだ湿式複写機であったので、出てきたばかりのコピー紙は若干湿っていて薬品の臭いがきつかった。

そのような作業中に永井先生がお声をかけてくださることもあった。ある時、「ここで見つからない本でも私が持っている場合があるから、あったら貸してあげられるよ」と、先生が声をかけて下さった。そこで私は、Ernst Cassirer の „Das Erkenntnisproblem in der Philosophie und Wissenschaft der neueren Zeit“ (Berlin 1922)について先生にお尋ねしてみた。先生は、「あれは必読文献だね、始めの方にクザーヌスについての論述がある、貸してあげるからコピーをとるといい、一度、私の家に来なさい」と応じて下さった。

先生のお宅にうかがう日、私はとても緊張して西馬込の駅に降りた。そこに広がる町並みは、初めて目にする起伏に富んだ住宅地であり、先生が住まう町という思いがなせるものか、日差しも明るいような気がした。私は玄関口で御本をお借りしてお暇

するつもりでいたのだが、思いがけないことに先生は私を日当たりのよい応接間に通してくださった。ひとしきりお話しをさせていただいて失礼したのだが、帰途の電車の中でお借りしたばかりの本を開いてみると、先生がお読みになって引かれたであろう鉛筆の印が処々に付されていた。私は、先生もこのようにして本を読まれているのかと、何か安堵するような思いが湧いてきた記憶がある。

今も、その時にお借りしてコピーさせていただいたものが手元に残っている。それは、上記の湿式複写機によるもので、先生の引かれた線にならうかのように、私の引いた線がある。両者が重なっている箇所もあれば、そうでない箇所もある。

いつの時点のことであったか、もはや記憶が定かではないが、研究指導をして頂く先生を決めて届け出ることになり、私はいろいろ考えた末、永井先生ではなく古代哲学がご専門の村治能就先生にお願いすることにした。それは、私のクザーヌス研究についての関心が、新プラトン主義的かつ中世的な方向からクザーヌスの哲学にアプローチしてみたいということだったからである。永井先生は、私が先生のご指導の下で修士論文をまとめるであろうと考えておられることは、これまでのご指導からも分かっていたので、永井先生には予め自分の願い出のことをお話ししておかねばならないと考えて、先生にお伝えした。すると先生は、それは意外だ、というような表情をされたけれども、快諾してくださった。

客観的にみれば、上記のように下村先生によるクザーヌス研究の学統を慕って東京教育大に進ませてもらった私が、下村先生の愛弟子である永井先生のもとで修士論文をまとめないということは、普通ならばありえない選択であった。しかし、当時の日本におけるクザーヌス研究の一般的方向性、つまり、カッシーラーらによる、クザーヌスを近代に引き付けて解釈する方向性とは異なる方向からクザーヌスを研究してみたいと考えていた私には必須の選択でもあった。若い大学院生の生意気な選択を永井先生は容認してくださったわけである。そのことは、これ以降も先生が私に対して以前と変わることなく温かく接して下さったことから私には分かった。そして、それだけに先生のありがたさが身にしみた。

先生は大学院の講義において、学問に対する厳しさをつねにわれわれに教えてくださった。われわれ学生が少しでもあいまいな態度や応答をすると、先生は口を真一文字に結ばれて鋭い視線をわれわれに投げかけられた。学生の意見や解釈を正面からはっきりと否定されることもあった。それは先生ご自身の確信に裏打ちされた姿

勢であることが分かった。

実際、先生ご自身も学問に対してはたゆまざる精進をされていた。先生は、時代が哲学に求める課題をたえず先駆ける形で研究され思索されては一書の形で世に問われていた。『生命論の哲学的基礎』という大著を岩波書店から刊行されたのは、私たちが修士二年生のときのことであったが、その直前には大学院のゼミでこの原稿の一部を私たちに読ませてくださったような気がする。私たち、少なくとも私自身は、この時点で先生が「生命論の哲学的基礎」という問題に取り組まれたことの意味が十分に理解できていたとは言えない。しかし、その後の時代の展開では、「生命」がまさに中心的テーマの一つとなって今日に到っているのである。

私が和歌山大学に就職してからも、先生は私を温かく見守ってくださった。竹内巧先生の招聘によって永井先生が大阪府立大学の集中講義に来られたことがあった。近畿地方にいた教え子の先生方が教室の前方に席を占めて、先生のご講義に耳を傾けられた。私も和歌山から電車に乗って聴講に通い、先輩の先生方の一角に座らせて頂いた。久しぶりに教え子に囲まれたのであろう先生は、夜の食事の際にとっても楽しそうだった。もちろん私も、先輩の先生方の仲間に入れて頂いて嬉しかった。

和歌山大学に勤務していた私は、クザーヌスの研究を深めるために、クザーヌスの故地である西ドイツ（当時）の Trier にあるクザーヌス研究所に留学することを考えて、Alexander von Humboldt 財団の研究奨学生試験に応募することにした。そして先生に推薦状をお願いした。すると、先生は、ドイツに勉強に行こうと決心したことはとてもよいことだとおっしゃって、すぐに推薦状を書いて下さった。そのおかげもあって私は首尾よく研究奨学生に採用され、そして約二年にわたってクザーヌス研究所で勉学することができた。帰国してほどなく、感謝の意を込めてミュンヘン大学前の広場の光景を描いた 19 世紀末のエッチングをお届けすることとした。しかしうかつなことに、その広場名を——購入した古書店からは聞いたのだ——思い出すことができなかったで、そのままにして「ミュンヘン大学前の広場の光景です」として永井先生にお届けしたのである。すると、先生から（拙論の抜き刷りをお送りする場合と同じく）直ちにご返事を頂いたのだが、先生はその礼状のなかに「「ミュンヘン大学前の広場の光景」のエッチングをありがとうございます」と記して来られたのだ。私は自分のうかつさを先生に教えられた思いがした。むやみに焦ることなく、広場名をしっかりと確認した上で先生にお届けするべきだったのだ。調べられるこ

とはとことん調べてから結論を出すのが学者としての最小限のわきまえであることを、先生から教えられたのである。

そこで調べてみたら、現在その広場は **Geschwister-Scholl-Platz**（ショル兄妹広場）と名づけられており、ナチ時代の末期にナチ抵抗運動に加わって処刑された有名なショル兄妹を記念する名称であることが分かった。いつか先生に「あの広場は **Geschwister-Scholl-Platz** でした」と直接にお伝えしなければと思いつつも、私の怠慢でそれを果たさないうちに、先生とお別れすることになってしまった。

調べるべきことはとことん調べた上で結論を出すべし、という永井博先生に教えて頂いた方法を保持することが、先生のお教えに報いることだと肝に銘じつつ、ささやかな研究を続けているところである。

（やまき・かずひこ 早稲田大学商学部教授）